

おじいちゃんが教えてくれたこと

坂井市立春江中学校 三年 坪田 光平

「あんな人等と話すん嫌やな」これが今までお年寄りや障害者の方に対する、僕の想いでした。

自分でも酷い考え方をしているな、と思うほどでした。まさか自分のおじいちゃんがあんな風になってしまうとも知らずに。

僕には大好きなおじいちゃんがあります。両親の仕事が農業だったので、小さい頃からそのおじいちゃん夫婦や、母方のおばあちゃんによく面倒を見てもらっていました。母方のおばあちゃんはもういないけれど、よく散歩やおばあちゃんの友達の家へ連れて行ってもらいました。しかし、その頃から、可愛がってもらいながら、お年寄りが苦手でした。上手く呂律が回らないためか、何を言っているのかよくわからなかったし、第一、何を話せばいいのかがわかりませんでした。

でも今、僕の大好きなおじいちゃんは「認知症」になっていて、何を言っているのかわからないときがあります。それこそ、僕の苦手なお年寄りと同じ状態になってしまっています。

その大きな原因がおばあちゃんの死です。もともと足腰が悪かったのですが、突然、朝起きたときに起きられないほどの痛みを腰に感じて病院に行ったのです。お医者さんの診断では腰の骨がつぶれて手術が必要だとのことでした。いつも正月やお盆には明るく僕を迎えてくれごちそうを用意してくれたおばあちゃんが苦しむ姿は今でも忘れません。そのときいつも物静かで口数の少ないおじいちゃんが、とても悲しそうな目をしておばあちゃんを見て心配そうにしていました。手術をしてから一年もたたずに病状が急変し、肺炎で亡くなってしまいました。それからのおじいちゃんは介護士の方の助けを受けながら生活しています。

一昨年、「おじいちゃんが訳がわからないことを言っているから来てほしい」と、隣のおばあちゃんから連絡がありました。そのとき僕は、「おじいちゃんが落ち着くまで待っていなさい」と母に言われ、車内で待っていました。これがおじいちゃんがおかしくなり出した最初のころの出来事です。「亡くなったおばあちゃんはどこや」と、死んでしまったおばあちゃんはまだ生きています。

思っているのです。次に行ったのは一ヶ月もたたない日でした。母が「車を運転させると怖いから」という理由でキーを隠していたのですが、どうしても車に乗りたかったらしく、ついには石を窓ガラスに投げつけ割ってしまったのです。いつも僕に優しくしてくれていたおじいちゃんの豹変ぶりに、僕はどうすることもできませんでした。

その後、おじいちゃんは色々な病院や施設などにかかりました。入院した当時は元気だったおじいちゃんが、環境の急激な変化のためか他の患者さんと同じようにやせこけ、ベットから起き上がれないときもありました。自分の大好きな人のそんな姿を見てしまったら、誰だって涙が出てしまうはずですよ。

僕はおじいちゃんのガリガリにやせて骨がゴツゴツの手をそっと握り、「頑張ってるね」と声をかけてあげました。僕に出来ることはないだろうか……。少しでも役に立てないだろうか……。その日はずっと、この言葉が頭を支配していました。とは言うものの、僕には介護の知識なんてないし、しょせん僕は無力なんだ、と思いしらされました。それでも僕に出来ることくらいあるはずだ、そう思って毎日のように何気ない時間があれば考えていました。そしてついにはわかったんです。とても簡単なことだけれど。僕にできることが。それは、ただそばに居て話を聞いてあげて、優しく接することでした。おじいちゃんや僕

の家から病院はとても遠く、母は看護師として夜勤などもあって忙しいので、会える時間が少なくなりました。だからこそ、会える時はたくさん優しくしてあげます。

ある日、僕と母とでおじいちゃんの元へ訪れたとき、いつもなら僕を見て母の名前を呼んだりするのに、その日は「光平、来てくれたんか」と笑顔で言ってくれたんです。とてもうれしくて、涙があふれ出しそうになる程で、その日はいつも以上に優しく接しました。

こうしておじいちゃんと一緒に居る事で、お年寄りの方や障害者の方への接し方が少しでもわかった気がします。そのおかげで、最近ではお年寄りの方や地域の方々と上手く話せるようになりました。病院に行ったときも、全く知らない患者さんにも話しかけられるようになり、その点ではおじいちゃんにとっても感謝しています。こんなに大きくなるまで一緒に居てくれて、優しくしてくれたことにも感謝しているのですが、今回のことは感謝してもしきれません。

おじいちゃんが僕に教えてくれたこと、それは「人を思いやる優しい心」でした。